

---

# 日常・非日常

白銀の白

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

日常・非日常

### 【Nコード】

N6707H

### 【作者名】

白銀の白

### 【あらすじ】

俺は、夏のある日、知らない世界に飛ばされた。何故、僕はこんなはめにあったのだろう・・・？

## ブローグ日常 自己紹介の代わりの 自分の世界（前書き）

私は初心者のため練習のためにこれを書いています。  
間違いがあったら教えてください。

## ブローグ日常 自己紹介の代わりの 自分の世界

これは、高2の頃の夏

母「恵。起きなさい」

うーん・・・、今日から、待ちに待った夏休みや。

今日は、友達と海に行く約束をしているんだっけ・・・

とりあえず、ベッドから、降りて、カーテンを開けてみる。

恵「うわぁ、眩しい。」

あまりの眩しさに、目を細めて外を見てみると、家の近くまで友達が来ていた。

その事に、少し驚いて、時計を見てみると、10時過ぎをまわっていた。

恵「おっと、もうこんな時間か・・・」

そう言つて、慌てて支度をし始めた。

丁度、支度が終わった頃チャイムが鳴った。

ドアを開けてみると、やはり俺の友人が居た。

??「おそいよー、恵<sup>けい</sup>くん」

恵「ごめん、ごめん。ちょっと、寝坊しちゃってさ。今、行こう

としたところだよ。」

??「ちよつと、じゃねえよ。何分、待たせる気だよ。バカ」

??「まあまあ、光くんも落ち着いて。さてと、もうそろつと行くか。」

光「今度、遅れたら、罰金な。」

恵「はい。」

光「ったく」

・この後も光は俺と小春に文句を言っていたことは言うまでもない・

## ブローグ日常 自己紹介の代わりの 自分の世界（後書き）

アドバイス等、お待ちしております。

**ブログの続き日常↓非日常 自己紹介の代わりの異界の扉（前書き）**

今でブログは終わりです。

次から、本編に入りたいと思います

## ブログの続き日常↓非日常 自己紹介の代わりの異界の扉

家から海まで、バスや電車を使って1時間。海に着いた頃には丁度お昼頃だった。

恵「ふう、やっと着いたー」

海は大勢の人で賑わっていた。

光「誰のせいでこんなに遅くなったんだか…」

小春「まあまあ・・・」

俺は今更ながら、口に出したことを後悔した。

小春「まあ、せっかく、海に来たんだから泳ごうよ。」

光「しょうがない。」

なんだかんだで、喧嘩にならなくて良かった。

・・・まあ、悪いのは、寝坊して遅れた、俺なのだが。

20分後

仲がいい。流石、幼稚園からの仲であると思う。

喧嘩をしていたことも忘れて、遊びまくった。

2時間後

小春「ふう、ちょっと疲れたね。ちょっと、休もうかな。」

恵「そうだね。」

光「あついな。かき氷食いに行こうぜ」

恵・小春「そうだね」

光「よし、じゃあ行こうぜ」

そういうことで、かき氷を食べに行くことになった。

5分歩いたところに海の家があった。

さっそく中に入ると中はあまり混んでいなくて、3人とも、すぐにかき氷を買うことができた。

早速、食べよう・・・

??「きゃー、」

光「なんか、聞こえなかった?」

恵「外だね。急ごう。」

小春「えっ?ちよつと、」

恵と光は走って行った。

小春「ちよつと待ってよ」

小春も慌てて走って行った。

思ったとおり、小さな子が溺れていた。

底は浅いが流れが強いため非常に危ない状態だった。

光「っ、あんな所まで流されてると、流石に俺達でも助けられない・

・・」

恵「行くよ」

光「っ、バカじゃないのか?流石に無理だろ?」

小春「そうだよ。止めようよ」

恵「それなら、二人は見てればいい。俺一人でも助けられる。」

恵は海に飛び込んだ。

流れが強いせいなのか、いつもより速く泳ぐことができ、子供の所にはすぐ着いた。

が、流れが強いせいか、思いど通りに、岸に戻ることができない。

光「クソ、あのバカ。」

そういつて光も海に飛び込んだ。

小春「光ちゃん・・・」

光「小春、お前は来るな。助けを呼びに行け。」

小春「で、でも」

光「いいから、早く。」

小春「う、うん、わかった。」

小春は助けを呼びに行った。

光「大丈夫か？」

恵「俺はともかく、この子は、危ないかも・・・」

光「くつ、早くしてくれ。小春・・・」

その時、海の底が、輝いた。

恵「なんなんだ？この光は？」

光「引つ張られてる？」

必死に泳ごうとしても、吸い込まれていく。

恵・光「うわー」

その光は大きくなりやがて、恵と光と子供を吸い込んだ。

そして、小春が戻ってくる頃には3人とも居なかった・・・

ブローグの続き日常↓非日常 自己紹介の代わりの異界の扉（後書き）

初心者なので、誤字脱字があつたら、教えてください。アドバイス等もよろしく願います。

## 1章非日常知らない世界に飛ばされた悲しい自分（前書き）

本編、非日常編に、入りました。どうか、駄作ですが、温かく見守って下さい。

## 1章非日常知らない世界に飛ばされた悲しい自分

1話 非日常 知らない世界に飛ばされた哀れな自分

あれから、何時間たったのだろうか？

そして、ここは、どこだろう？

小屋？どうして、こんなところで寝ていたのだろうか？  
かなりの時間がたったような気がする。

そう言えば、光とあの子がいない。

2人が心配だ。探しに行こう。  
そう思っ、起き上がる。

恵「うーん」

起き上がって、四肢を伸ばす。

??「あら？起きたのかい？」

恵「ここは？」

??「リーフォン山の麓の小屋さ。」

恵「リーフォン山？そんな山、日本に、あつたっけ？」

??「ニホン？なんだい？それは。」

恵「ここは、日本じゃないか？」

??「何を言っているんだい？ここは、ミルダーシャ帝国のリーフ  
オン山の麓だと、言っているじゃないか。」

恵「ミルダーシャ帝国？聞いたことないな・・・」

??「不思議な子だね。記憶喪失かい？」

恵「それは、たぶん、違う。」

??「じゃあ、あんた、何者なんだい？」

恵「俺？俺は、佐藤恵<sup>さとつぐひ</sup>。皆からは恵と呼ばれてる。海水浴に行ったときに、溺れている子を見つけて、助けようとした時に、変な光に包まれて・・・そこからは、覚えてない・・・」

「なるほどね。溺れている子を助けよとした時に、扉が開いてしまったんだな。それで、気を失って、川で、下着姿で、寝ていたんだな。」

恵「変な言い方しないでよ。寝ていたんじゃないで、気を失ってたただだよ。ともかく、助けてくれたことはうれしいけど、君は誰？」

ロア「おっと、自己紹介してなかったな。俺は、ロア・ニーネツド。好きなように呼んでくれ。今は、特に仕事についてる、訳ではないが、生活は普通にできてるし問題はないだろ。」

恵「たぶん、こういう人が、うちの世界では、ニートと呼ばれるものなんだろうね・・・」

ロア「ん？なんか言ったか？」

恵「何も言ってないよ。」

ロア「？まあ、明日は、早いから、そろっと寝ておけよ。」

恵「早い？」

ロア「そう、明日は、おまえを召喚した人を探しに行くから」

恵「召喚した人？」

ロア「そうだ。召喚した人がいなければ、扉が開く訳がないのだからな。それに、いつまでも、俺が世話をするわけにはいかないしな。」

恵「元の世界に、帰りたい・・・」

ロア「そんな、簡単にはいかないぜ。おまえを召喚した人にもう一回、扉を開いてもらわなければ、帰れないな。」

恵「そんな・・・」

ロア「わかったら、もう寝ろ。」

俺は仕方なく寝ることにした・・・

## 1章 非日常知らない世界に飛ばされた悲しい自分（後書き）

アドバイス等、お待ちしております。

## 2章非日常 朝、とりあえず、準備（前書き）

おはようございます！、こんにちは！、こんばんわ！

白銀の白です。非日常編、2章を書き終えたので、読んでください。初心者なので変なところが、あるかもしれません。そこは、教えていただければ、幸いです。

## 2章非日常 朝、とりあえず、準備

ロア「起きろ！」

そう言つて、ロアは、俺の布団をひきはがす。

恵「まってよ、まだ眠い……」

ロア「別に、いいんだぜ？」

恵「何が……？」

ロア「転送方陣を使つて、お前を変なところに飛ばすとか……」

恵「転送方陣？」

ロア「そう。転送方陣。これを使えば、あらゆるものを飛ばすことができる。中級魔法さ。」

魔法？そんなの、おとぎ話でしか聞いたことがない。そんなものがあるのか？

ロア「あるよ。ここは、お前がいた世界とは違つたさ」

恵「簡単には信じられないな…… って、どうやって心を読んだ？」

ロア「読心術さ。相手の心を読む力の事なんだ。まあ、これは、魔法でも何でもないんだけど……」

恵「じゃあ、簡単な、魔法を見せてよ。」

ロア「めんどくさい。魔物にあつたら、見せてやるから、それまで待つてろ。」

恵「魔物？」

ロア「そう。魔物だ。お前の世界にはいなかったらと思うが、この世界では、町の外は殆ど魔物の巣だ。だから、お前も、町の外に出るときは、気をつけろよ。」

恵「じゃあ、もし俺が魔物に遭ったら、どうすればいい？」

ロア「そりゃ、逃げるか、闘うしかないだろうな。そうだ。おまえ、何も持っていないだろうから、この剣を貸してやるよ。」

恵「いいの？こんな高そうな剣を・・・」

ロア「いいんだよ。俺は現役を引退したから。それに、全ての事が終わったら、返してもらうからな。」

恵「現役？」

ロア「わりい、こつちの話だ。忘れてくれ・・・。それより、もうそろっと出るぞ。準備ができたなら、外に来い。早くしないと、置いて行くからな・・・」

ロアは、外に行ったようだ。

恵「分かった。すぐに準備する。」

呟いて、準備を始めた

## 2章非日常 朝、とりあえず、準備（後書き）

感想、アドバイス等、お待ちしております。

### 3章 非日常 旅の始まり、その前に魔法（前書き）

おはようございます！ こんにちは！ こんばんわ！  
白銀の白です。とりあえず、旅の支度編はこれで終わります。

### 3章 非日常 旅の始まり、その前に魔法

準備が終わり、俺は外に出た。

恵「おまたせ。」

ロア「お、来たか。」

俺が来る前に何をしていたかは分からないが、片手で本を持っているところを見ると、読書でもしていたのか・・・

恵「何、読んでるの？」

ロア「ん？これか？これは、魔書と言って、魔法のことが、書かれている。魔道書と呼ばれることもあるな。」

恵「それを読めば、魔法が使えるようになるん？」

ロア「それなりに、知識がある奴ならな。お前も、読んでみるか？」

恵「いいの？じゃあ、少し見せて。」

・・・3分後

恵「読めない。っていうか、英語？」

ロア「英語？なにそれ？」

ロアは、本当に分かっていないようだ・・・

恵「うちの世界にもいくつかの、国があつて、その国の中の1つにアメリカという国があるんだけど、その、言葉。」

ロア「ふーん、なるほどね。」

なんとなく、分かってくれたようだ。

恵「そういえば、この世界の言語は日本語なんだね。おかげで、会

話ができて助かったよ。」

ロア「日本語？ああ、なるほどな。お前に国の言葉か。」

恵「そうだよ。」

軽くうなづく

恵「なるほどね……。この世界では、うちらの世界には無いものもあるけど、共通しているところもあるんだ……」

この世界に来て、不安なことが大きいけど、そう考えると少し気が楽になってきたような気がした。

恵「あ、ごめん。こんなに長話するつもりはなかったんだけど。」

ロア「ん？別に気にしてねーよ。」

恵「じゃあ、いいんだけど。もうそろっとう行こうか。」

そう言っただけ俺らは歩きだした。

### 3章非日常 旅の始まり、その前に魔法（後書き）

累計アクセス数が200を少し超えたので、次は、特別編（日常編）を書きたいと思います。

え？なんで100の時にしなかったかですか？それは、僕が気付かなかったからということで、すいません。

応援、感想、アドバイス等、お待ちしております。

#### 4章日常↓非日常 私は・・・（前書き）

今回は特別編ということで、小春目線の話にしてみました。これからは、たまに、主人公以外の目線からの話も作っていききたいと思います。

#### 4章日常↓非日常 私は・・・

恵と光とあの子が行方不明になってから、約1日がたつ。昨日は、あんなことがあったので私は、一人で家にいた。皆は、もう諦めると、言うけど私は諦めなかった。

小春「大丈夫。きっと、どこかで生きているはず・・・」

私は自分にそう言い聞かせた。

そうしなければ、私も泣いてしまいそうだったから・・・私が好きだった人たちは簡単には死なない。絶対に生きてると自分に言い聞かせる。

それでも、2人の顔を思い出すと、涙が出てくる。

小春「どうして？どうして私一人を残して、みんな行ってしまふの？お願いだから、帰ってきてよ。」

そうしなきゃ、私は・・・

っと、その時、携帯の着信音が鳴った。

小春「何よ・・・」

呟いて、中を見る、メールだった。内容は、

父「2人が見つかった。とにかく、急いで病院に来てほしい。」

ということだった。私は、急いで支度をする、部屋から走って行った。

私は、混乱していた。2人が見つかったという喜びと、2人がもし、

死んでいたらという不安。

でも、きっと大丈夫だ。2人は、絶対に生きてる。そうでなければ私・・・

そう思うと、また泣けてきた。

2人に会うことに対する感動？そう、2人に早く会いたい。でもここからでは、かなり遠い。

とりあえず、バスで行くことにした。

病院は、バスに乗って、12個先のバス停の近くだった。

私は、バスから降りると、走って病院に向かう。

病院に着き、窓口に向かう。

小春「佐藤恵君と伊藤光君は、何号室ですか？」

相談員「ちよつと待って下さい。えっと、二人とも南塔の104号室ですね。」

小春「わかりました。ありがとうございます。」

軽くお辞儀をして、104号室に向かった。

104号室……。

コンコン・・・、軽くノックをすると中から、「どうぞ。」と声がした。

ゆっくり、ドアを開けて入ると

二人は、意識がなく横になっていた。

父「大丈夫。意識がないだけで、まだ生きている。心配するな。俺はこれから、先生と話してくる。お前は、どうする？」

小春「私はもう少し、ここにいますよ。」

父「わかった。」

そう言って、父は部屋から出て行った。

その瞬間、恵と光の寝ているベットの間に光り始めた。

小春「え？何これ？吸い込まれてる？」

もつと強い光を発して吸い込まれる力も強くなっていく。

小春「きゃあー！！」

私は助けると言う前にその光に吸い込まれてしまった。

「」

#### 4章日常↓非日常 私は・・・（後書き）

感想、アドバイス等をお待ちしています。応援のメッセージを頂けると、作者はうれしくて、飛び跳ねます。累計アクセス500を超えたので、次は、番外編（非日常 光の話）を書きます

## 5章 非日常 俺はこれから・・・（前書き）

今回は、光目線で話を作りたいと思います。

最近、宿題とか部活やらで投稿が遅いのですが、許して下さい

## 5章 非日常 俺はこれから・・・

俺は、あの光に飲み込まれてから、町で目覚めた。

そして、この町の、メインストリートだろうと思われる道を進むと、大きなお城があった。

光「ここはどこだ？こんな所見たことないな・・・」

とりあえず、ここが何処だか確かめる必要がありそうだと。  
この道を、真っ直ぐに行けば城につきそうだと・・・。

光「とりあえず、行ってみるとしようか・・・」

何もしないと始まらない。とりあえず、城の近くまで行くことにした・・・。

どうやら、此処は日本なのか？言語が日本語なのである。  
町を歩く人の声が聞こえた。

町人「2人の王子が呼び出されたらしいわよ。」

町人2「え？なんで？」

町人「前にやった、テルノダル帝国との戦で勝ったことはいいけど、ミルダーシャ騎士団がボロボロで、立て直して貰おうとしているらしいよ。」

王子がよびだされた・・・？まあ、俺とは無縁の事だろう。まあ、ともかく此処はミルダーシャ帝国という国だということが分かった。そして、前に戦争をして勝ったが、騎士団がボロボロだということも分かった。

が、何故俺が呼び出されたかはわからない・・・

そうこうしている内に城の前までたどり着いた。  
そして、これから何しようか、考えた。

光「さて、これから何をしようか・・・」

??「あの、貴方はコウ様ではありませんか？」

光「え？」

??「あ、やっぱりコウ様だ。会いたかった。」

え？誰だ、この子？なんで、俺の名前を知っているんだ？

リーネ「10年も会ってないですから、覚えていませんか？私は、リーネと申します。」

光「リーネさん？初めまして、俺は・・・」

リーネ「分かります。貴方は、コウ様ですね。しかし、本当に、忘れてしまっているとは・・・」

なんか、この子、俺の事を知っていそうだな。

光「リーネさん、俺、なんか此処の事、全然わからないのですが・・・」

リーネ「そんな、私なんかに、敬語を使わないでください。そうだ、コウ様に会ったら、案内するように言われてたのを忘れていました。どうぞ、こちらです。」

そう言つて、リーネは城の中に入つて行つた・・・  
俺も、慌てて、ついて行つた・・・

## 5章 非日常 俺はこれから・・・（後書き）

アドバイス、応援等、よろしくお願いします。  
特に応援下さい。よろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6707h/>

---

日常・非日常

2010年10月12日17時04分発行